

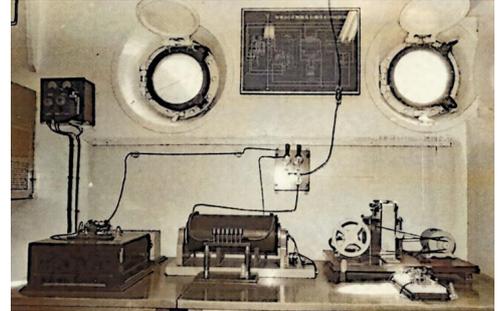
z・kz・k

【日本の元気 山根一真】ウクライナ侵攻は日本海海戦を彷彿 ロシア「通信力」軽視、SNSやネットの情報戦でも完敗

国内

2022/4/16 15:00

短期間の首都キーウ（キエフ）陥落を果たせなかったロシア軍は、軍隊としての秩序も誇りもなく略奪や民間人殺戮（さつりく）など自暴自棄とも思える戦争犯罪を重ねて撤退したと伝えられている。その原因の一つは、まともな情報通信能力を擁していなかったことにあるのではないかと思う。それは117年前の日本海海戦を彷彿とさせる。



郵政博物館に収載の「戦艦三笠36式無線機」（出典・文化庁「文化遺産オンライン」）

戦艦8隻を筆頭に38隻からなるバルチック艦隊は、バルト海の沿岸リバウ軍港から224日もかけて日本近海に到着、1905年5月27日、対馬沖で戦艦4隻など108隻からなる日本の連合艦隊の迎撃を受け、翌日までに壊滅的な敗北を喫した。

ロシア軍の敗因は、長期間の航海による疲弊に加え、練度が低く戦闘訓練が不十分で士気が劣る水兵、混乱していた指揮系統、燃料に無煙炭が得られなかったことなどが語られてきた。その中であまり大きな扱いをされていないのが、日本の連合艦隊は「無線通信力」が勝っていたという点だ。

イタリアのマルコーニは、電気火花が離れた場所に信号として伝わることを発見した。雷光でラジオからガリガリという雑音が聴こえるあの原理だ。電気信号による通信は電線を使ってきたが、19世紀末、マルコーニは初めて電線なしで空間経由で情報を送る無線通信に成功した。スマホの普及も元をたどればマルコーニのおかげなのである。

マルコーニは無線電信会社を設立し無線機の販売を開始したが、それはきわめて高価だった。日本海軍は軍艦1隻の価格の半分もしたというその無線機の購入を断念したが、日本は独自に火花式無線機を開発。連合艦隊がバルチック艦隊を迎撃した際には「三六式無線機」を全艦に装備し終えていた。一方ロシア海軍は、無線機の存在は知っていたものの評価せず未搭載だった。

そのため連合艦隊は、無線による各艦相互の密な連絡により効率的に攻撃を続けることができた。連合艦隊司令官、東郷平八郎が発した「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」は、旗艦「三笠」から大本営あてにその火花式無線機で送信した電文なのである。

私がそのことを知ったのは70年代。電子式テレビジョン発明者、高柳健次郎博士を訪ねた時だ。日本海海戦に勝利した海軍の水兵たちは、その勝因の一つである火花式無線機の巡回デモを小学校などで行っていた。小学生だった高柳博士は「電線なしで信号が空を伝わる！」と感動。それが契機で電子技術者を目指し、世界初のテレビジョンの発明につながった、と話してくれたのである。

ウクライナに侵攻したロシア軍は前時代的な無線通信機能しか供えておらず、指揮官の命令が前線の兵士に伝わらなかった。携帯電話を使うロシア兵も多かったようだ。ウクライナ軍はそれらを傍受し戦闘を有利に進めたという。

兵士の士気が低く、数カ月にわたる戦闘訓練による疲弊などバルチック艦隊に通じることが多いが、ロシアはバルチック艦隊の敗因を忘れ「無線通信」の能力差で敗退したことになる。さらにSNSやネットによる情報戦でも完全に負けている。プーチン大統領は明晰な頭脳の持ち主と言われるが、情報通信力では化石頭の持ち主かもしれない。

■**山根一真（やまね・かずま）** ノンフィクション作家、福井県年縞博物館特別館長。北九州博覧祭北九州市パビリオン、愛地球博愛知県総合プロデューサーなど多くの博覧祭、万博を手がけてきた。近刊は『スーパー望遠鏡「アルマ」の創造者たち』。「山根一真の科学者を訪ねて三千里」（講談社）などを連載中。理化学研究所名誉相談役、JAXA客員、福井県交流文化顧問、獨協大学環境共生研究所客員研究員、日本文藝家協会会員。

©2020-2022 SANKEI DIGITAL Inc. All rights reserved.